

◆ばあさんの気持ち

★

「ソイレント・グリーン」という映画がある。観たことはないが、アメリカのSF小説を映画化したものらしい。もう数年前の話だが、熊本の巣鴨＝子飼商店街で知り合ったおばあさんが、「あたしゃもういつ死んでんよか。早よう迎えに来てほしかあ。いっそソイレント・グリーンにでも行こうかしら」と言うので、「サイレントじゃないんですか」と聞き返したら、「いや、ソイレント、映画の題たい」と言われ、この映画の存在を知った。ネットで調べたら、ソイレントとはSOY(大豆)とLENTIL(レンズ豆)の合成語。・・・豆は人類の主食の1つだ。

映画の中では、ソイレント・グリーンは、食糧危機に陥った未来のニューヨークで市民に配給される食料の製品名である。で、その原料は、なんと人肉！未来の地球で自然資源が枯渇し、やむなく人間を原料にするしかなくなったという、究極のストーリー。子飼商店街のおばあさんは、もうこの世には飽きたので進んで体を提供したい、というような主旨でそう言ったのだった。冗談だけど冗談とも言えない、後期高齢者の持つ独特のオーラをまとった言葉だった。

★★

先日、熊本市の地域コミュニティセンターで「まちづくり活動組織の再生」のテーマで講演した。聴衆は自治会とかまちづくりに携わる人、約60人。70歳以上の方もかなりおられた。約1時間話した後で質疑応答コーナーがあり、そこで、「若いお母さん方がまちづくりに参加しない。どうしたらいいか」と質問された。前の米国務長官のオルブライトさんのような迫力のある、たぶん後期高齢者の、女性。まちのパトロール隊を率い、あれこれとなんでも世話を焼くリーダー格の人だ。私は迷わず「若い世代は、(あなたのような)親の世代とは合いません。一緒にいると説教されたり、大きすぎる働きを期待されるので避けるのです。若い人には、バリバリ仕事してもらい、子どもを塾とか部活とか高校・大学にやるのに一生懸命になってくれればそれでいい。だから年寄りには年寄り同士、倒れて死ぬ瞬間までまちのパトロールをしてください。後顧の憂いはないのだから。30代のママもやがて40代のおばさんになり、50代になれば考え方も違ってくる。跡を継ぐ者は必ず現れる。」と回答したら拍手喝さいを浴びた。

★★★

ばあさんの力はすごい。じいさんもすごい。おまけに高齢化社会で、その数がめちゃくちゃ多い。その強大な力が後ろ(の世代)に向かってしまうと、たまったもんじゃない。ばあさんやじいさんが、子育て中の世代に、日曜日は地域づくりを加勢しろとか、地域の催し物に出てこいとか、プレッシャーをかけるのはやめてほしい。若い世代だって、まちをパトロールしているお年寄りには感謝の念は持っている。でもいろいろ忙しい。体もきつい。地域のことで、私たちがしたいことはちょっと違う。・・・これは、若い世代の正直な気持ち。

過疎地では、当然のことながら年寄りが頑張るしかない。都市部でも、やっぱり高齢者が元気に地域コミュニティを支えるのがよいと思う。どうぞ、がんがん好きにやってください。

★★★★

年寄りのことは年寄りになってみないと絶対に分からない。ソイレント・グリーンのことも、頭では理解できても、寿命に近づいた年寄りの気持ちの本当のところは分からない。でも、死ぬ瞬間まで通学路のパトロールができれば、それが一番いいんじゃないかと思う。10月15日から熊本でネンリンピックが始まる。お年寄りや関係者が、大変だ・きつい・面倒臭いなどブーブー言いながらも、ものすごいエネルギーをたぎらせている。なぜか少し安心する。